

妙高ひまわりキャンプ

児童養護
施設との
連携

1.事業の概要

(1) 対象について

「妙高ひまわりキャンプ」は、児童養護施設である上越市若竹寮に入寮している心や身体に様々な課題を抱えた子どもたちを対象に実施した2泊3日（幼児・小学生は1泊2日）のキャンプである。

本事業の目標は、子どもたちが、普段、生活している環境とは違う妙高の豊かな自然の中で思いっきり活動し、様々な人と触れあい、協力していくことの楽しさを学びながら心を解放すること、自分一人ではない、頼れる大人、仲間がいるなどを肌で感じ取り、今後の生活の自立へのエネルギーを培うことの2つである。

今年度の「妙高ひまわりキャンプ」には若竹寮の入寮者42名（幼児男子1名 女子3名 小学生男子10名 女子10名 中学生男子5名 女子3名 高校生男子7名 女子3名）が参加し、8月17日（水）～8月20日（土）の期間に実施した。

なお、昨年の活動の様子、子どもたちの実態を受け、今年度のキャンプの研究対象は、中学生、高校生のみとする。

(2) 昨年度の課題

昨年は「青少年教育施設と関係機関の連携のあり方を示す」「自然体験活動により課題を抱える子どもたちの変容を明らかにする」を研究課題として取り組んだ。初年度ということもあり、企画・運営とも手探り状態であったが、一定の成果をあげている。

しかし、他機関との役割の明確化と継続的な連携、子どもたちの

変容を明らかにする工夫、活動プログラムにおける子どもたち同士の協力、関わり等といった点で課題が残った。

2.研究の概要

前述の課題を受け、次のように研究課題を継続・追加設定した。

<課題1>「自然体験活動により課題を抱える子どもたちの変容を明らかにする」

<具体的な方策>

子どもの変容を捉えやすくするために、評価の視点として、事業の目標を踏まえた「求める子ども像」を以下のように具体化した。

- ①寮の先生の力に頼らず、自分たちで活動内容を計画し、実施することで自立心を育む。
- ②活動の役割分担の責任を果たすことで、自己存在感、自己肯定感を高める。
- ③環境が違う集団生活の中で活動時間やマナーを守り、規範意識を高める。
- ④寮の仲間と協力しながら活動を進めることによって、コミュニケーション能力を高める。

この視点を事業後のアンケートの質問事項に反映させ、子どもたちの変容を見取る。また、事業前後に実施する「IKR評価用紙」による「生きる力」の変容の度合いも見取る。

主な活動プログラム

DAY	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
DAY 1 8/17(水) 1日目	晴天				到	開会式		昼食	①北沢川散策				夕食	②びっくりナイトハイク	入浴		就寝
	荒天				着				館内オリエンテーリング								
DAY 2 8/18(木) 2日目	晴天	朝の集い	朝食						③野外炊事								
	荒天							バスで移動	④笹ヶ峰ハイク		バスで移動		夕食	⑤キャンドルセレモニー	入浴		就寝
DAY 3 8/19(金) 3日目	晴天	朝の集い	朝食						⑥クラフト								
	荒天							昼食	(木の葉のTシャツ)		IKR	閉会式	出発				

<課題2>「子どもたちの実態に即したプログラムデザインや運営方法を明らかにする」

<具体的な方策>

活動プログラムを作成する上で、その内容、運営に関わって以下の点を考慮した。

- ①「ひまわりキャンプ」実施以前に、担当職員（ボランティア学生を含む）は若竹寮の事業に参加したり、学習ボランティアとして指導したりしながら、子どもたちの実態把握に努める。
- ②活動プログラムを子どもたちに選択させる。提示する活動プログラムは、自己決定ができる場面、仲間と相談する場面、協力が必要な場面が設定しやすいことを考慮する。
- ③選択したプログラムの詳細について、子どもたちと話し合い、その意見をプログラムに反映する。
- ④活動によっては子どもたちの役割を明確にし、責任をもたせる。
- ⑤各プログラムは時間的な余裕をもって組込む。
- ⑥普段の生活とは違って、特別な時間を楽しむために、プログラムの内容や日程を中・高校生グループと幼児・小学生のグループに完全に分ける。

3.子どもたちの様子

(1) 北沢川源流探検

<概要と運営のポイント>

源流の自然環境の中で、植物観察や水生昆虫採集など、解放的に様々なことをグループ内で自由に選択して、散策する。安全面のみ指示する。

水の冷たさを肌で感じながら、源流がつくる幻想的な風景を楽しんでいた。休憩時には、川の瀬に網を入れて夢中になってイワナや水生昆虫を探している様子が見られた。



(2) びっくりナイトハイク

<概要と運営のポイント>

肝試しの要素を加えた、森のオリエンテーリングコースを使ったナイトハイクである。子どもたちの要望で実現したプログラムである。子どもたちの一部が運営に協力する。

4～6人の小グループをつくり、夜の森を歩いた。コースのいたるところで楽しい声や驚きの声が聞こえた。夕方から、一部運営をお願いしていた子どもたちが事前準備を意欲的に手伝う姿が見られた。また、活動中に飛び入りで、脅かす係を手伝う者もいた。自分たちで盛り上げて楽しもうという気持ちが伝わってきた。

(3) 野外炊事

<概要と運営のポイント>

料理のメニューは、自分たちの力量に合わせて選択する。できあがった料理をみんなで試食し合う。少人数（4人）で班を編成し、個人の役割分担を多くする。

班のリーダーが中心となって、材料を切ったり、道具を準備したりと、事前に分担していた役割をそれぞれが行っていた。できた各班の料理をみんなで試食した。お互いに料理のよい点を褒め合い、各テーブルには笑顔があふれていた。



(4) キャンドルセレモニー

<概要と運営のポイント>

班のリーダーが火の儀式（火の神、火の子）に協力する。全体で歌う歌を決め、CD等の準備をする。

点火の儀式や歌の準備など、短い時間の打合せの中で、分担を決めた。リハーサルで動きを確認し、本番では、それぞれの役割を果たしていた。レクや歌の時には自分から楽しもうとする意欲的な様子が見られた。



(5) 笹ヶ峰ハイキング

<概要と運営のポイント>

笹ヶ峰の夢見平コースとドイツウヒの森コースから個人で選択する。指導員と一緒にコースをまわり、大自然を楽しむ。

指導員の案内で、選択したコースをのんびり回った。子どもたちは、ブナや白樺の森、珍しい植物、牧場の牛を観察しながら、各ポイントで説明される指導員の「自然の巧みさ」の話に耳を傾けていた。



(6) クラフト (木の葉のTシャツ)

<概要と運営のポイント>

クラフトの内容を話し合いで決める。班ごとに自然物(葉、実、枝)を採集し、まわりと相談しながらデザインを決め、自分だけのオリジナルTシャツをつくる。

周辺から採集してきた自然物を使って、自分だけのオリジナルのTシャツをつくった。班ごとにアイデアを出しながら、楽しそうにつくっていた。最後には、できた作品を自慢げにみんなに紹介していた。



進行が早まり、それによって生じる空白の時間には、特に活動を組み入れず、自由に過ごさせた。周辺の広場を使って、みんなで野球をしたり、凧揚げをしたりするなど、楽しそうに遊ぶ姿が見られた。

4. 評価結果・考察

(1) 「IKR評価用紙」の結果

環境変化の影響を受けないように、今回は事前の「IKR評価用紙」の記入を生活の基盤である若竹寮で実施した。キャンプ前後の「IKR評価用紙」の結果は表1のとおりである。

全体(生きる力)の得点は向上しているが、その向上には有意差が見られなかった。詳細な項目について見てみると、心理的社会的能力の測定項目である、積極性「前向きに物事を考えられる」、非依存「小さな失敗をおそれない」、明朗性「失敗して立ち直るのが早い」等の項目で他の項目と比較して大きな向上が見られた。いずれも直接、活動に関わる項目である。このことは、子どもたちの観察でも見られたように、「妙高ひまわりキャンプ」を通して、子どもたちが未体験のプログラムへ意欲的に参加し、新たなことにチャレンジしていたことの表れとも読み取ることができる。

		人数	平均値	標準偏差	t 値
全体(生きる力)	事前	18	118.3	23.6	* 1.661
	事後	18	123.8	23.9	
心理的社会的能力	事前	18	58.3	13.0	* 1.731
	事後	18	61.8	11.9	
徳育的能力	事前	18	35.4	6.7	* 1.423
	事後	18	37.0	7.3	
身体的能力	事前	18	24.6	6.1	0.601
	事後	18	25.0	6.5	

表1 キャンプ前後の「IKR評価用紙」結果 (*P<0.5)

(2) 「事後アンケート」の結果

図2は子どもたちが各プログラムを4段階で評価し、「とてもよかった」と答えた人数を示している。この結果を見ると、キャンドルセレモニー、クラフト、野外炊事、ナイトハイクの順で子どもたちの評価が高かった。

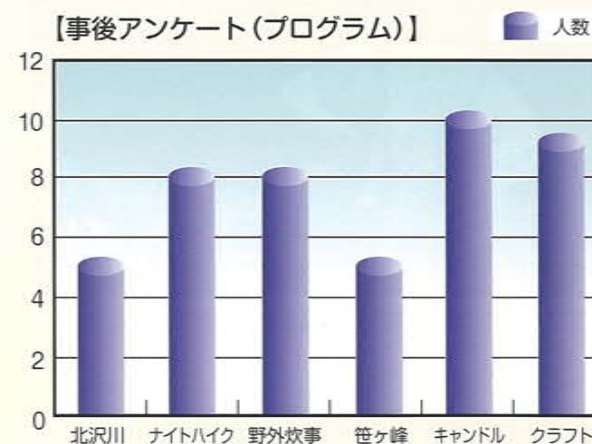


図2 事後のアンケート結果(プログラム)

キャンドルセレモニーを評価した理由としては「一人ひとりが主役になれたから」「普段、話をしない人とも楽しくできた」「みんなで歌やゲームを楽しんできた」などの声が聞かれた。また、野外炊事では、「みんなで協力することができたから」「係分担ができていて、準備や片づけがすばやくできたから」等、人とのかかわりに関するコメントが多かった。これは活動中に仲間のことを意識して取り組んでいたことを物語っており、役割分担が機能していたことを示すものである。

プログラムの内容については、自己選択の場面や役割分担の話し合いの場面など、自由度が高く、子どもたちの関わりが多いものほど評価が高い傾向にあることが分かった。

図3は「妙高ひまわりキャンプ」中の自分の行動を4段階で評価し、「よくできた」と回答した人数を示している。この結果から「時間を守る」「ルールを守る」「みんなの話を聞く」ことを意識していた子どもが多かったことが分かった。このことから、環境が変わっても、子どもたちの中では規範意識が高く、リーダーが中心となってコミュニケーションがうまくとれていたことが伺える。

Y子の感想

今回は自分たちで活動やコースなどを選ぶことができたので、自分が行きたいコースに行けて良かった。前回と同じ源流探検や野外炊事もあったけど、違う内容だったので、新しい発見ができた。一省略— みんな意見を聞いてまとめるのは大変だったけど、とても良い経験になったと思う。

H男の感想

最初は、少しやる気のない人が多数いた。でも、活動していくうちに、どんどん楽しくなってきた最高の3日間になったと思う。今回はほとんど自分たちの力でやっていたので、心から楽しむことができた。一省略— 来年も同じように自分達である程度企画・運営すればよいと思う。また、冬のキャンプもとても楽しみ。

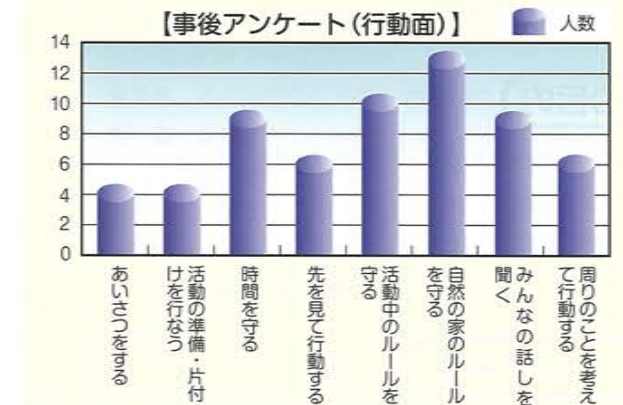


図3 事後アンケート(行動) n=18

2泊3日の全体を通しての評価は「とてもよかった」「よかった」を合わせると100%となっている。「今回はほとんど自分たちの力でやっていたので、心から楽しむことができた」という子どもの感想からも、このキャンプが充実していたと捉えることができる。子どもたちは、まだ十分とは言えないが、事業前に掲げた「具体化した求める子ども像」に一歩近づけたように感じる。改善すべき点は多々あるが、回数を重ねることに成長していくものと考えている。

まとめ

(1) 「自然体験活動により課題を抱える子どもたちの変容を明らかにする」ために

目標に掲げた「求める子ども像」を評価できるように、行動に関する項目をあげ、上越教育大学の五十嵐透子先生からもご指導いただき、アンケート用紙を作成することができた。そのアンケートによって、本事業での生活・行動に関する側面を子どもたち自身の視点から評価することができた。しかし、より客観的に評価するために、ボランティア、若竹寮の先生からも同様のアンケートをとり、考察する必要がある。アンケート内容についても、質問事項が重複している部分もあるので、今後修正改善を加えていきたい。

子どもたちの変容について考察するには、事後のアンケートの他に、「IKR評価用紙」による「生きる力」の変化や自由記述、観察等も含めて総合的に判断する必要がある。

(2) 「子どもたちの実態に即したプログラムデザインや運営方法を明らかにする」ために

事業実施の前に学習ボランティアとして若竹寮へ訪問することができた。しかし、各学生の訪問回数が1~3回程度しか取れなかったため、十分な子どもたちの実態把握までには至らなかった。また、学生ボランティアの大部分が1年生であり、子どもたちとの接し方やボランティアとしての経験不足が新たな課題となった。来年度も継続して、同事業へのボランティアとして関わってもらえるように働きかけていきたい。

若竹寮の子どもたちと話し合いながら、意見を反映させ、子どもの実態に即したプログラムデザインをすることができた。役割分担の話し合いや自己選択の場面を多く設定し、主体的な参加を促すようなものとなった。その運営に関しては、自然の家職員が大部分を担っていたが、子どもたちの力だけでもできることも多いように感じた。来年度は、子どもたちが基本的な計画から運営まで行えるような流れをつくってきたい。